義輝伝　幕府再興物語

坂川　一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
義輝伝　幕府再興物語

【Ｎコード】
Ｎ３２３９Ｙ

【作者名】
坂川　一

【あらすじ】
半年以上溜め込んでいたものをこの機会に投稿し、連載してみようと思った次第であります。
義輝（男）として転生した主人公。時は戦国。リアル戦国無双をして華々しく散る気はない！うまく立ち回って幕府を再興してやろうではないか。とかいう話です。
これには転生、チート、主人公補正的ご都合主義といったいわゆるテンプレが潜んでいます。ムリという方はリターンしてください。

其の一

それは悪夢か。
なにもない真っ暗な世界。

それは恐怖か。
自分が無に帰って行く。そんな感覚。

それは希望か。
暗闇の中に一つだけ、光が見えたのは。

俺にできたのはただ一つ。

光に向かって手を伸ばすことだけだった。

そして目が覚めた。
なんだかひどい悪夢を見た気がする。
寝汗びっしょりだぜまったく・・・・・体がおかしい？なんとゆーか動かない。

そして確認してみる。

手が・・・間違いなく俺の手が・・・・・赤ちゃんになってる。
なんじゃこりゃあ！？まったく持って意味がわからんつーか、どこ、ここ？
いやまず落ち着こう。状況把握が先と見る。

まず俺の名前は・・・・・思い出せない！？ｗｈｙ？名前すらわからないとはどーいうことでぃ。
俺は確か大学帰りに・・・・そう、車だ。車に跳ねられてそれで・・・・まさか俺死んだ？
よくある転生って奴ですか！？笑えんよ。卒業まであと少し、一流企業に内定をもらって順風満帆だったんだよ！やり直しなんて望んでねーよ。神様のバカヤロー！！！！！！

「オギャーオギャー」

叫ぼうとしたが代わりに泣き声が出てしまった。
恨み言すらできないらしい。

「あらあらもう起きてしまったの義藤」

自分のことで精一杯だったため隣を気にしていなかった。
そしてそこにはびっくり美人なお姉ーさーんがいた。

この女性が我が母君のようだ。つまり俺の名前は義藤というらしい。

「あら？すごい寝汗。それに熱もあるみたい。大変！」

それからはてんやわんやの大騒ぎだった。
侍女やら家臣やら医者やらが部屋を訪れては、義藤様、義藤様とうるさいのなんの。

「オギャーーーーー（熱があるんだから静かにしろーーーーー）」

自身が置かれた状況を理解するのにそれから三年ほどの月日を必要とした。
そう、三年間俺は我慢してきたのだ。おっぱいや離乳食？的な超薄味の食べ物を食べてすくすくと育ったのだ。
はじめはあまりのまずさに戻しかけたが・・・・

さてここまででわかったことをいくつか紹介しよう。
まず俺の名は足利義藤。そう『足利』だ。
そして俺がいるのは東山南禅寺。
殆どあったことはないが、父は室町幕府十二代将軍足利義晴とのこと。
母は慶寿院と呼ばれている。
不思議なことに乳母はいない。
以前母上にそのことを尋ねたらすごい目で見られたあげく、『お前は母が嫌いなのか！？』と泣かれてしまった。どうやら乳母という概念が存在しないらしい。

ここまできて俺は絶望した。
自分の正体を理解したからだ。
義藤と呼ばれていて気がつかなかったがこの家族構成を見る限りこのままいくと俺は足利義輝になってしまいそうだ。

足利義輝といえば剣聖将軍と名高いがそれ以上にその最期、すなわち松永久秀等の暗殺劇で華々しく散ったことのほうが有名だろう。
つまりこれがタイムスリップであるのなら俺はいずれそうなってしまう可能性は高いのである。

冗談じゃない。せっかく生まれ変わったのにまた殺されてなるも

のか！

そのときから俺の目標は死亡フラグ回避。そして畿内平定となった。

とはいってもすぐにどうこうできるわけではない。今の俺は将軍のご子息ではあるが三歳児で、将軍家の力はほとんど無い傀儡政権であり、俺自身寺で暮らしているのだから。

当面はおとなしくして、信用できる家臣を選別することにしよう。いざというとき仲間が多いほうがいい。

そして父上には悪いが大いに矢面に立ってもらおう。プライドが妙に高い父上は権力に固執しやすいからな。うまく父上を言いくるめて細川晴元とまずは和解してもらおう。

其の二

さて、義藤です。
五歳になりました。

報告です。
家臣ができました。
二つ年上の細川萬吉と善吉『姉妹』・・・・・

うん、女の子だね・・・・・義輝で細川といったらもう藤孝しかないじゃん！なんで双子姉妹！？

この世界おかしい！聞くところによると女性の戦国大名が多いらしい。というか有名どころはたいてい女性らしい。なんだそれ？謙信女性説なんてもんじゃないですね。女尊男卑ですか？というとそうではなくなんか性別の壁はあんまりないらしい。
それに明らかに未来の食事だろってのも時々出てくる。何でも南蛮渡来ですますんじゃねーよと言いたい。

まあ、そんなこんなで今は学問に勤しんでるわけだが、この時代、基本文書が漢文なのでどうなるかと心配したが、我が子供脳はスポンジが水を吸うかの如く新たな知識を吸収してくれるので割とすぐに覚えられた。
そのときは神童だのと騒がれて冷や汗ものだったけどな。
傀儡政権の次期将軍が神童って暗殺必至じゃね？って。

基本的に勉学以外にすることがないというのが実状だったり・・・・・時々バカ親父がへまやって近江だかに連れてかれるけど、それはそれで楽しいからいいかなって。

萬吉たちが来たのはそんな退屈をもてあました頃だった。
正直嬉しかったよ。同年代の子なんていなかったし、誰を信じていいのかわからなかったし、暇だったし、カルチャーギャップというか時代間ギャップで精神的にきつかったんだよ。

「義藤様。集中してください」

「ぬう・・・」

ボーとしていたら藤英から叱られてしまった。
つややかな黒髪に赤みがかった瞳。影のある雰囲気。黒い着物。
美少女であり、将来絶対美人になるであろう容姿なのだがいかんせん雰囲気がなぁ・・・・
地獄○女みたい。

歳は四つ上の九つで時々こうして勉学を教えてくれる、年が年なので基本だけだが。

五歳の子供に座って漢字練習させるなや！遊ばせろよ！教育学部からやり直せ！

と、内心反発するが怒ると怖いのでまじめに取り組む。
まあ、藤英も子供だし文句を言ってもしょうがないのだ。ここは俺が大人になろう。

そんなふうに日々過ごしているのだが、このまじめに勉強しているということがまたすごいと家中で評判になっているのだ、子供って面倒だな・・・・

「失礼します！義藤様ー羊羹を入手しました！」

「ま、萬吉だめだよう、そんなふうに乱暴に開けたら～」

バアン！！力強く戸が開き二人の少女が顔を出した。
礼儀もへったくれもない登場をかましたのは、細川萬吉。その後ろで申し訳なさそうにしているのが善吉。

ドタドタと部屋が一気に騒がしくなった。

「萬吉！羊羹羊羹」

俺は正座を解いて萬吉達の元へ向かう。
まるで羊羹に吸い寄せられるように・・・・・と

「萬吉！善吉！」

藤英の一喝。
ビクッ！と俺を含めた三人が動きを止める。

「お、おねーさま・・・・」

「姉上・・・・いらしてたのですか」

「いらしてたのですか、じゃありません。今は義藤様のお勉強のお時間です」

クッ！やはり藤英が最後の砦となるか。

九歳児にしてこの威圧感！ハンパねぇ！

「ッ大丈夫だよ藤英。これ食べたら勉強するって。ほら、あまり詰め込みすぎるのも良くないでしょ」

「しかし慶寿院様からは最低でも二刻半は、と」

なにぃ！

愕然とする俺

二刻半！？どこの世界に五時間もぶっ通しで勉強する五歳児がいんだよ！？

母は俺を殺す気か？

「それはたぶん一日でってことじゃないかな？べつに休み無しってわけじゃないよね？」

「そうでしょうか？」

「そうだよ。ほら、萬吉たちがせっかく持ってきてくれたのに食べないわけにはいかないじゃん？藤英だって食べるでしょ？」

「姉上の分もありますから！」

「お姉様どうぞこちらに！」

入り口で縮こまっていた二人が慌てて話を合わせる。

うう・・・と思案する藤英。

責任感と甘いものの誘惑がせめぎ合っているのだ。
はたして羊羹は起死回生の一手となるか！？

「わかりました。少しだけ休憩にします」

藤英は折れた。
甘味が勝ったのだ。

ぱあっ！と晴れ渡る青空のような笑顔になる俺たち。
やはり藤英も女の子。甘いものには勝てないのだ。
退屈すぎる勉強から逃れたこの喜び！
小学校の休み時間を思い出すね！

あの時は若かった・・・・今のほうがずっと若いけど。

萬吉達もその喜びは変わらないようだ。

いや、今まさに叱責の対象になっていただけに、その恩赦は格別の喜びだろう。
ついさっきまでの二人の心境は、鬼監督に呼び出されたサッカー部員Ａという感じではなかろうか。
そしていざ行ってみたら、Ａチーム昇格の話だった、というような喜び。
よく分からんか・・・

ニコニコしながら包みを開ける萬吉。隣でそれを眺める俺と善吉。

こういうとき包みというのは非常に厄介だ。

すぐに開けたいのになかなか開けることができない。

ましてそれは高貴な身分のものが食す高級菓子。包みもしっかりとしている上いかにも一流が描いたというような絵が描かれている。

破ってしまうのは心許ない。

羊羹め、うまい具合に焦らしてくれる。

はやくはやくと萬吉にオーラを送る。

それを感じてしまったのか萬吉の包みの開け方が乱暴になってきた。

急いては事を仕損ずると言うが、これがまさしくその典型。

バリッという気持ちのいい音とともに包みが破れ、中の羊羹が飛び出してしまった。

「あっ」

「ふえ」

一体何が起こったのか。飛び出すだけでなく天井近くまで舞い上がった羊羹は、地球の引力に引かれて放物線を描いて落下する。

その場にいる全員が羊羹の軌跡を目で追う。

動くことなどできるはずもない。

そして———————————————

べしゃ

藤英の黒髪の上に見事な着地を決めてしまった。

「あ」

「げっ」

息を呑む俺たち。

萬吉など紙を破いたときのまま目を見開いて硬直している。

藤英はうつむき、その表情は前髪に隠れて伺えない。

そして、藤英がゆらぁりと立ち上がった。マリオネットのような人形めいた動き。

「あわわわわわ」

「あ、姉上ぇ」

今にも泣きそうな双子。

俺は恐怖のあまり動けない。

藤英はかくん、と首を右に傾ける。

赤みがかった左目だけが前髪から現れ何とも不気味。そして・・・・・

「いっぺん・・・・・・・死んでみる？」

「「「アーーーーーー！！」」」

其の三

親父殿と晴元を言いくるめて和解させてからしばらく経った。
父たる十二代将軍に話を聞いてもらう機会はそう多くは無かったので苦労したが、晴元をこちらが利用してやりましょうという感じで話を進めたら割りと早く事が進んだのだった。
晴元としても将軍との対立は避けたかった。そこに将軍側から和解しようという話になったのだから飛びつくのは当たり前。
今はお互いがお互いを利用しあっているという状況になったのだ。

「脇が甘いッ！！」

パアン！という乾いた音が道場に響く。

ここは南禅寺に構えられた武道場。といっても大層なつくりではない。なにせこの南禅寺は応仁の乱で伽藍が大焼失して以降再建が思うように進んでいないのだ。
そんな南禅寺道場には今二人の人物が木刀を握り締めて向かい合っている。

何を隠そうこの俺、足利義藤と剣聖・塚原卜伝である。

俺の知る歴史でも義輝が塚原卜伝から剣の指南を受けるという話はあった。それが史実かどうかは別としてだ。そしていろいろと突っ込みどころのある世界ではあるが俺が後の義輝である以上なんとしてでも卜伝から剣を習っておきたかったのである。

そんな折、あの塚原卜伝が京に参られた！という噂が流れたのは天啓であろうか。
俺はすぐに藤英に頼み噂の真偽を確かめてもらった。

藤英の報告の結果はすぐに返ってきた。
どうやら俺のように噂を確かめようとしたものはいるらしく、その中にはもちろん腕に覚えのあるものが多数いた。
それらは件の人物に挑み、片っ端から討ち取られていったらしい。
圧倒的な強さを持つ剣士。間違いなく塚原卜伝であろう。

俺は確認が取れてすぐ、晴元に頼み込んで卜伝に引き合わせてもらったのだった。

なぜ晴元をとおしたかって？政治中枢にいるのがヤツだからさ。
忌々しいことにな。

時を少し遡り、洛中。
天文法華の乱によって応仁の乱に迫る壊滅的打撃をうけた京は今懸命な復興の只中にあった。
かつての活気を取り戻さんと、商人たちが商いに精を出している姿がそこかしこで見られる。が、それも少し中心から外れれば野ざらしになった死体が放置され、焼き払われ、打ち壊された家々が未だ数多く存在している。
そんな洛中を歩いて回るのは黒い長髪は後頭部の高い位置で纏めた女性。名を塚原卜伝といった。

「店主、団子を頂きたい」

「はいよ！」

威勢の良い声が店内から聞こえる。

卜伝は店先の長いすに腰掛け、団子に舌鼓を打つ。

手近な店に立ち寄ってみただけであったが、ここの団子はかなりの一品だと卜伝は思う。

「この店の団子は他と違うな。とても美味だ」

「！？・・あ、ありがとうございます」

接客を行っている娘に率直な感想を送ってみる。が、声をかけられた娘のほうはひどく驚いている様子。礼を言うのがやっとであった。

それもそのはずで卜伝はすっかり風景にとけこんでしまっていたのだ。気配を消すのではなく、周囲に同化させる。超一流の武人ならではの自然な絶技に卜伝がここにいるということを失念していた彼女は突然声をかけられて吃驚したのだった。

「すまない、驚かせてしまったかな」

「あ、いえ。こちらこそ申し訳ありませんでした」

「いや、そうかしこまらずとも良い。ところでわたしは様々な国を渡り歩いてきたのがこのような美味い団子は初めてでな。さすがは京の都と感激していたのだ。なにか工夫を凝らしているのかな」

「当方は創業百二十年になりますのが、歴史を胡坐をかかず、ほかの店に負けぬよう独自の工夫を凝らしております。それが創業者の

教えでございますので」

「ほう、それは良い心構えだ。初心忘るべからず。武芸にも通ずる基礎の中の基礎よ。ところがそれを実戦できるものが驚くほど少ない。あなたたちは大した者だ」

そういうと満足したのか卜伝は金を支払って雑踏にまぎれていった。

「ここまで来ればもうよかろう」

人気の無い死臭漂う路地にやってきた卜伝は独り言をつぶやいた。それは本当に独り言であったのだろうか。自分自身に言い聞かせるものであるのか、もしくは背後に現れた達に投げかけたのものなのか・・・・・

「・・・塚原卜伝殿とお見受けするが如何に？」

影、より正確に言えば剣客というヤツか。四人の強面の男達は一様に卜伝を睨み、そう問うてきた。

「如何にもわたしが塚原卜伝だが・・・なんのようかな？」

卜伝にこのように対峙するものは大きく分けて二通り。

その見目麗しい外見に誘われて集まる下種と、剣豪の塚原卜伝と知って近づくものである。

「我等は貴殿に尋常の勝負を望む。剣を抜かれよ」

「ふむ、そう来たか。だがなあ、わたしにはやる気が無いのだよ。悪いが他をあたってはくれんか？」

「ふん。所詮は女子か。臆病風に吹かれて剣すら抜けんとは情けない。そのような者が剣聖などと持て囃されているのは気に食わぬ。ここで切り伏せてやるッ」

血気に逸る男達に対し卜伝の士気は低い。相手の実力のほどはすでに見えている。例え四人がかりであっても卜伝に傷一つつけることは叶うまい。

まず一人目の男が剣を抜いて切りかかってくる。剣が抜かれている以上剣士として果し合いに応じねばなるまい。

「遅い・・・」

名乗りもせずに襲い掛かってきた男を卜伝は刀の一刀をもって切り伏せた。他の三人にはいつ鞘から抜かれたのかも見えなかったに違いない。

「火遊びで死ぬ覚悟があるのならば、かかってくるがいい」

「クッ・・」

卜伝の剣に恐れをなしたのかジリと後ずさる。

「このッ・・囲め！なんとしても首を上げるぞ！！」

男三人。取り囲めば勝機はあると踏んだのか、卜伝を取り囲む。

卜伝はそんな三人を蔑視の視線で牽制する。
この者たちは一対一で勝負する気概もないただの下郎である、と。
「へ、へへ・・・さすがに囲まれちまったらどうにもできねえだろ」
「命乞いするなら今だぜ、まあそのときはたっぷりと楽しませてもらうことになるだろうがなあ」
下卑た視線で卜伝を見る男達。
「なるほど、剣を競おうとしたのは先の一人のみであったか・・・あの者には悪いことをしたのかも知れんな・・・少なくともお前達と同じように見ていたのはわたしの失態だった」
と、そこで卜伝の身体が数十倍に膨れ上がった。
いや、そのようなことはありえない。単純にそう見えたというだけの話だが、卜伝の内から発せられた気がすでにこの戦場の趨勢すら決めていた。
「貴様等のような悪党を放置するわけにもいかん。ここで骸を晒すがいい」
そこからは最早勝負ですらなかった。
鬼気に当てられ満足に動けなくなった者を斬るだけの単純作業。
三太刀振るってそれで終わりだ。
「はあ・・」

卜伝は何の感慨も無く四つの骸を眺める。
このところこのようなことが多い。自分には剣を振るうことしかできない。故にそれを極めんと武者修行に出た。
武者修行を始めたころはただ必死に剣を振るうだけだった。
それが気づいてみれば剣聖などと呼ばれている。尋常の勝負を挑んで来る者も多くなったが、どれも我が身に傷一つつけることのできない雑兵ばかり。最強を極めた卜伝は剣を振るうということに虚無感すら抱いていたのだ。

「その武技・・さすがは名にし負う剣聖・塚原卜伝殿」

「さきほどから私を見ていたのはあなたか」

突然かけられた声にも驚くことなく、初めから予期していたという卜伝。
卜伝の見つめる先、物陰から姿を現したのは艶やかな黒く長い髪を持つ少女だった

「お初にお目にかかります。三淵藤英と申します」

深々と頭をたれる藤英に卜伝は目を細める。
警戒していると言われればそうであろう。この藤英。見たところ元服も済ませているかいないかといった歳だ。それが血の海に沈む肉塊に臆することなくこの惨劇を作り出した本人に対峙している。
おまけに図太いわけでなく、深い教養を感じさせる所作に、おそらく何かしらの武芸の心得があると見る。

「して、このわたしに何用かな」

「はい、こちらをご覧ください」

藤英が渡したのは一通の書状。それを受け取って卜伝は目を見開いた。

細川晴元の花押ッ！？

室町幕府の管領細川晴元。幕府権力を一手に引き受ける人物からの書状であった。

「足利義藤様の剣術指南役・・・このわたしが」

「はい、お引き受けくださいますよう・・・」

しばし卜伝は考える。この話を断ることはできる、がそのあと京にいることはできないだろう。

京に未練はないが、少々流浪の生活も飽いたころあいだった。噂の神童、足利義藤。ぜひ見てみたい。

「分かりました。この話お引き受けいたします」

これが冒頭に至るまでの経緯である。

其の四

塚原卜伝が剣術指南役として南禅寺にやってきて早二ヶ月が過ぎた。

神童とまでよばれる足利義藤の人となりを見極めんとここまでやって来た。学問はできても剣術はまた別であるし、将軍家のものであるといって礼節を欠くようならすぐにでもこの役目を辞す腹積もりであった。それが二ヶ月続いているのは卜伝自身が義藤を弟子と認めたからに他ならない。

（それにしても）

眼前、仰向けに倒れ付した少年を見ながら卜伝は思う。

（本当にたいしたヤツだ）

この日、すでに稽古は休みを挟んではいるが三刻になろうかとしている。本来は過剰な運動量として切り上げるべきである。が、

「よし、次行きましょう、師匠」

「まだやるのか？今日はもう切り上げるべきだと思うが」

「大丈夫です」

齢１０に満たない義藤は木刀を構え、真っ直ぐに卜伝を見つめている。初めは覚束なかった構えも今では堂に入っている。

（本来は遊びに甘味にと言ってる歳だろうに）

卜伝は今まで一度も義藤から弱音を聞いたことがない。見た目にそぐわず精神面が大人なのだ。二つ年上という彼の側近のほうが子どもらしいとも言える。

「ゼエエエイ！！」

義藤の打ち込みを難なく防ぎ、返す刀で脳天を打つ。

「うおっとッ」

それを義藤は身を捻ってかわした。

（これだ・・・この動き）

義藤との稽古を始めて真っ先に驚いたのがその運動神経と目の良さだ。まったくの素人が試しに振るった自分の剣筋を確かに目で追っていた。

尋常ではないのだ。それは。

もしかしたらとんでもない大物になるかもしれない。そう思ったがために、卜伝は義藤の弟子入りを認めざるを得なかったのだ。

困ったことに俺はまだ師匠から一本も取れていない。

それでも、成長はしてるんだぞ。剣につぎ込める時間は全てつぎ込み、もとが義輝だからか飲み込みも早かった。それは師匠すら驚愕させるほどだったらしく。

『お前の才が恐ろしいな』

とまで言われてしまった。

この二ヶ月で基礎を修得、さらにその先まで到達しそうな勢いである。それでも

「だあああああッ！！」

「まだまだ」

「くう・・・」

俺はひりつく額を摩りながら恨みがましく師匠を見る。

その師匠は俺の視線など物ともせず涼しげな顔で立っている。

「もう一度お願いしますッ」

「その気合はいいのだがな」

やれやれといった様子で師匠が言葉を発した。木刀を肩に担ぎ、構えを解いている。

「なあ義藤。お前は何故そうまでして剣に拘る。次期将軍の立場ならもっといい思いができるはずだろう。わたしにはお前が焦っているようにしか見えん」

「む」

言われて俺は押し黙る。確かに俺は焦っている。このまま行けば俺は暗殺されるという運命にあるのだ。身を守るための力は必要不可欠。

なにより、平和な時代に生まれたときの記憶が俺にこの時代を否定させていた。人死にが許容され得る時代は断じて認められない。かといって俺にできることはほとんどない。だから俺は今できることに全力を尽くしているのだ。

「生き急ぐやつは大抵志半ばで死んでいく。今の世はそういう時代だ・・・・特にお前のような立場の人間はな」

精悍な師匠の顔にうっすらと陰りが見える。

諸国を渡り歩いてきた彼女はおそらくそういう場面を数多く見てきたのだろう。中には師匠自身の弟子もいたかもしれない。

「お前はもう少し自分のことを大切にしたほうがいい」

「・・・・そうは言われても、俺にはやらなければいけないことがあります」

この家に生まれた責任。自分の運命。それを知るが故に、引けない。

「・・・・・はあ・・・わかったよ」

と、俺に近づいてきた師匠が担いでいた木刀を俺の頸に押し当ててきた。

「足利義藤討ち取ったり、だ」

「それは卑怯ではないですか」

「卑怯なものか、お前の立場は常にこれだぞ」

「ッ！」

そう、これがもし真剣であったなら、それ以前に師匠が刺客であったなら、俺はここで終わっていた。この時代将軍家だから血を流さないなんて事はないのだ。気の休まるときなどそうそうない。知っていたはずだ。いや、知っていたつもりになっていただけかもしれない。それを堂々と指摘してくるのは流石塚原卜伝と言ったところか。

師匠は剣を引くと、俺に背を向けて数歩離れた。

「構えろ」

「はい」

木刀を握り、構える。視線の先にいる師匠の構えは恐ろしく優美であり無骨。一部の隙もなく、それでいて自然。

「お前がその歳で確りとした考えを持っているのは分かっている。それが危険なものであるということも。だが、ただの剣術指南役のわたしはどうこう言えた立場じゃない・・・・・だからお前に可能な限りわたしの剣を教えてやる。つまらんことで死なないくらいに・・・・鍛えて上げてやる」

師匠から溢れるナニカが俺を打ち据える。気・・・・というヤツだろうか。向こうの世界では創作に見るだけで終ぞ体験することの

なかったそれが、この空間に満ち満ちている。
たまらず、全身から汗が噴出す。
「剣を振るうのは人を斬るということだ」
「それは当たり前のことです」
踏み込んできた師匠の振り下ろしを顔面すれすれで防ぐ。当然筋力の差があるため鍔迫り合いにはしない。後ろに飛んで勢いを逃す。
「その当たり前をきちんと理解している者は多くない。剣とは人を守り、導く指針であると同時に畜生の牙であり、爪である」
「ぐッ」
確かにその通りだ。
言ってみれば剣とは力の象徴であり、そこに善悪は関与しない。それ故にそれを振るう者は心身を清く保たねばならないのだ。
「だからこそ剣を振るう者には、ただそれだけで大きな責任が課せられるのだ」
「・・・・・それを承知した上で、剣を学んでいます」
「それは解った気になっているだけだろうよ・・・・」
それはそうなのだろう。実際俺はまだ一度も人の死に直面していないのだから。
俺は師匠の数合の打ち込みを何とか凌ぎきり、仕切りなおしに持ち込んだ。

「『天の時』『地の利』『人の和』があれば、一撃必殺の剣『一之太刀』を繰り出すことができる」

「？」

「ふっ・・我が必殺剣のことさ」

天の時、地の利、人の和・・・確か孟子にそのような一説があった気がする。天の時は地の利に如かず。　地の利は人の和に如かず。という一説だ。

天の与える好機も土地の有利な条件には及ばず、土地の有利な条件も民心の和合には及ばない。

剣と関係があるのだろうか。

「深く考えることは、ないさッ！！」

「うあ！！」

さっきよりも幾分か速い打ち込み。受け止めることができたのは狙いが甘かったからだ。そして、今師匠の剣は俺に弾かれている。俺は体制が整っていて反撃できる。

俺はこの二ヶ月ではじめて勝機を見出した。

「隙ありぃい！！」

俺の全力の一撃は、師匠の頭部に向かって繰り出された。絶対に避けることはできないだろう完璧なタイミング。

そう思った矢先、信じられないことに、茶色い刃は虚空を切り、俺は地に伏せていた。

「これが『わたしの』一之太刀だ。一之太刀ってのはな、ようは一撃で相手を倒すことさえできればそれでいいんだ。自分にとって最も相性のいい技を磨き上げて必殺にまで高めたもの、それが一之太刀」

だから教えられる技じゃないんだよ。悪びれもせずそう言う師匠の言葉を俺は意識の端で聞いた。

其の五

毎度おなじみ義藤だ。
師匠こと塚原卜伝から剣術を習って二年ほどが経つ。師匠からは剣術以外にも心の持ちようみたいな、なんというか人としての基本みたいなことも教わった。そんな師匠だが、今は流浪の旅に出てしまっていてすでに京にはいない。できることならこのままここに残り、わが軍の一角を成して欲しかった。

もちろん師匠が旅立ってからも修行を怠ることはしていない。

それ以外にすることがなかったということもある。
繰り返す日々を学問と剣術に注ぎ込みながら、出来得る範囲で情報収集も行った。
藤英や幽斎、藤孝のように私心なく仕えてくれる家臣をもてたことは僥倖だった。
彼女達のおかげで俺は京を含め近畿一帯の政情を大まかながら把握することができていたのだ。

最近では細川高国派の残党等の散発的な蜂起に一向一揆が重なって、それの始末に晴元は手を焼いているらしい。
ちなみに細川高国というのは晴元のに敗れて自害した前管領のことであり、一向一揆が活発になっているのも元を辿れば晴元のヤツが彼等を利用したからに他ならない。
自業自得というヤツだな。

かといってザマーネエナァッ！！とかいっている場合ではない。
これらの事件は畢竟、室町幕府の権威失墜に繋がっているわけで、しわ寄せは無論俺に来る。

どこまでも迷惑なヤツだ・・・・

さらに、調べていく中で分かったことだが、どうにも晴元を追い落としたからといって俺の力が高まるかといえばそうでもないらしい。

敵は他にもいるのだ。

例えば、伊勢貞孝という人物。

幕府の財政を担う、政所における長官である執事の職についているコイツはやはりというべきか晴元と癒着しているらしく、人柄も横柄で図々しく周囲から煙たがられているようだ。

これを排除しなければ財政は握られたままとなる。

このほか、香西元成、三好政長、茨木長隆、木沢長政のような晴元派の武将たちが幕府内で幅を利かせているし、晴元を敵視している細川氏綱もいる。

とくに氏綱は管領の立場を狙っているし、それは幕府再興とかいう立派な目的ではなく、自己利益のためである事は明白である。

管領になり得る立場の氏綱は細川政権にとって目の上の瘤であるのは間違いない。

と、こんなふうに俺を取り巻く環境は火薬庫のように危険なものになっているのであった。

ああ、ちなみに萬吉が藤孝で善吉が幽斎な。あいつ等この前、少し早いけど元服済ませたんだよ。そんときに名前変えたの。幽斎は姉妹の中で自分だけ『藤』の字がないことに不服そうだったが、そ

うそう偏諱を連発するわけにもいかないから我慢してもらった。
何れ他の事で働きに報いてやらないとな。

ヒュン！！

白刃が舞い、数瞬も経たず鞘に収まる。
俺の生前の世界で

ーーーーーーーーーーーーーー居合い

と呼ばれた技術だ。本来この時代には存在していないが、俺はこの最速の斬撃を『俺の一之太刀』にすべく独自に修行を行っている。

「・・・・・ダメだな」

ついついそう漏らしてしまう。
どうしたものか・・・・もともと実践で使えるのか疑問視される技であるし、大道芸だからか。必殺になれる気がしない。
これでも相等な速度で抜打ちできるのだがなあ・・・
並みの兵卒なら剣を振り上げた瞬間に頸を刎ねる自信がある。まだしたことないけど。

それでも師匠の必殺に比べればまだまだ脆弱と言わざるを得ない。

足元に散らばる落ち葉に目を見遣る。
断ち切られているのは俺の修行で斬った紅葉たち。

ここ、晴元邸の紅葉も鮮やかに色づく、そんな季節の夕焼けが俺の世界を紅く染め上げる。

「はあ、ちょっと休憩するか」

俺は縁側に腰掛け煮詰まった頭と疲れた身体を休ませることにした。

遠くから大人たちの笑い声が薄らと聞こえてくるのは、ここの家主である細川晴元が主催する宴会が盛況である証だろうな。

父上をはじめとする重臣達と、公家を招待した大規模なもので、先の一揆を鎮圧した戦勝祝いだとか何とか・・・・

俺は挨拶を済ませて、公家等に顔を覚えてもらってから席をはずしたのだ。派手派手なのは好みじゃない。こうして一人で空でも眺めていたほうが風流でいい。落ち着く。

「小倉山　峰のもみぢ葉こころあらば　今ひとたびの御幸待たなむ」

藤原忠平の歌だ。

和歌など趣味ではないが、日々学問に励んでいるおかげで、ある程度諳んじるところまで来ている。すごいだろ。でもこれできないと公家に取り入れないんだよね。

あと和歌出来ると一目置かれるようになる。とくにこの京ではそれが顕著だ。

「ん？」

不意に、人の気配を感じた。

誰か知らないがこちらを伺っている者がいるようだな。

「そこにいるのは誰だ？」

木々の只中。ちょうど大きな松が植えられている所に確かに人の

気配がする。
こう見えて視線には鋭いぞ、俺は。
松の大木、その奥を見据えながら、刀に手をかける。もし相手が賊徒の類ならすぐに応戦せねばならない。

「・・・申し訳ありません」

返答を期待していなかったために、あっさりと出て来たのは少々意外で呆気にとられてしまった。
大木の陰から現れたのは絹のような艶やかな黒髪を持つ、少女だった。

――――――――――――――――身勝手なッ！！

身のうちに溜め込む怒気を必死に押さえ込みながら、長慶は思う。
怒りの矛先は父の敵であり、主君の細川晴元、そして三好政長。
延いては力ない我が身に向けられている。

政長は長慶の父、元長と仲が悪く晴元の讒言して一向一揆を煽動し、謀殺したのだ。それがどれほど無念であっただろうか。
あまつさえ自ら起こした一揆が抑えきれないからといって元服したばかりの長慶を呼び寄せて鎮圧に当たらせている。
しかも晴元はそれをまるで自分の手柄のように扱っているのだ。

この晴元邸でのバカ騒ぎも長慶の憎悪の念を膨れ上がらせるだけの増幅器でしかなかった。

（修羅に堕ちることができれば、気兼ねすることなくヤツを殺せるのにッ）

生憎と長慶には感情に任せて動けるほどの自由はなかった。自らに何かあれば、三好の家はどうなる。父の血を引くものは間違いなく討たれることになる。十河家に入った一在も運命を同じくするだろう。故に動けない。晴元の配下に甘んじるしかないのだった。

「晴元様、わたしはこれにて失礼いたします」

「長慶か・・うむ、ご苦労であった。下って良いぞ」

我慢が限界に達する前に、長慶は宴会場を後にすることにした。

「お体の具合が悪うございますか？」

「ああ、いや・・なんでもない。心配をかけたな」

外に出てすぐ、侍女が声をかけてきた。阿波にいたころから仕えてくれているために事情を知っている。心に巣くう激情を察したのだろうか。

「あまり無茶をしないでくださいませ」

「分かっている。今大事あっては何も出来なくなるからな・・・・

しばらく一人にさせてくれ」

「分かりました。わたくしはここでお待ちしております。日が沈む前にはお戻りください」

長慶は晴元邸の庭を歩きながら、色づく木々を見て回る。

そうしながら深呼吸を繰り返して怒りを沈めていく。決して消えることのない怒りは心のうちの奥深くに降り積もり、幼い心を少しずつ、少しずつ蝕んでいる。

（これほど綺麗な紅葉ですら、あの晴元の物だと思うと憎らしく思えるものなのか）

己の中の鬼がそれほどに大きくなっているのだと気が付いて呆れを通り越して自嘲する。

そんな折だった。

ーーーーーーーーーーーーーーーヒュンーーーーーーーーーーーー
ーー

何かが大気を切り裂く音が聞こえる。

何か、ではない。間違いなく今のは刀を振るった時の音。

ーーーーーーーーーーーーーーー敵かーーーーーーーーーーーーー
ーーー

晴元を憎むのは何も自分一人ではない。誰かが刺客を送り込んできた可能性もないわけではない。晴元がどうなろうと知ったことではないが、自分に飛び火するのは避けたいところ。

（誰が剣を振るっているのか、それだけでも確かめておこう）

そう思うと長慶は音がするほうへ向かっていった。

幸いにして手近に植えられていた松の幹は長慶を隠すには十分すぎた。

気の裏に隠れ、様子を伺ってみる。

視線の先にいるのは一人の少年だった。自分と同じか少し下くらいだろうか。

晴元の屋敷にいるということは晴元の家臣の子息か何かだろう。

刀を鞘に納めたまま、ただそこに立ち尽くしている。

（一体何をしているんだろう・・・・）

そのとき、少年の頭上から一枚の紅葉がはらはらと落ちてきた。

「ッ！？」

一瞬の出来事だった。

紅葉が落ちてくるや少年は刀を抜き放ち、その勢いのまま振りぬいた。中空を漂う紅の葉はその中心から二つに割られて風に乗って流れていく。

そして気が付けば、すでに刃は鞘の中に納まっている。

（抜刀したまま敵を斬る・・・・そんな技は聞いたことがない）

おまけにその速度。まさしく電光石火の如し。

その後も何度か抜刀を繰り返し、加えて舞うように刀を振るう。

（なんて、美しい剣・・・・）

長慶は時を忘れ、言葉を失って、その刀捌きに魅入っていた。
少年が刀を一振りするごとに、胸のうちの雑念が切り払われていくようにすら思えた。

今の長慶にとってあの剣舞は『破魔の剣舞』といっても過言ではなかったのだ。

少年は休息をとるためか縁側に腰掛け、和歌を口ずさんでいる。
武だけでなく教養もあるようだ。
そんな中、突然少年と目があった――――――――――――気がした。

「そこにいるのは誰だ？」

間違いではなかった。確かに気づかれている。

（でも、どうやって）

驚愕を押し殺している間に、少年が刀の柄に手をかけている。
それはまずい。
賊とでも思われたか。誤解を持たせたままで斬り合いになれば数合と持たずに切り伏せられることは自明の理。

「・・・申し訳ありません」

長慶はすぐに姿を現して誤解を解く方向で動き出した。

其の六

「申し訳ありません」

現れたのは幼さの抜けきらない少女だった。
黄金色の瞳と肩口までの黒い髪。年のころは俺と同じか少し上といったところだろうか。
こんな女の子に刀を向けようとしていたのか、と思って俺は少し申し訳なくなってしまった。

「えーと、君は？」

ここは晴元のお屋敷だ。防備はちょっとした城並みであり、出入り口にもちゃんと衛兵が立っている。簡単に潜り込むことはできないし、迷い込むなどありえない。
とすると、彼女は今日ここに集まった諸将の親族だろうか。帯刀しているから武家なんだろうケド。

「はい、わたしは三好長慶と申します。もしよろしければお名前を伺っても？」

・・・・・・・・・・・・・・・なん、だとッ

「・・・ごめん、もう一度名前聞いても？」

「はあ・・・三好長慶と申します」

ナ☆ガ☆ヨ☆シ！？
どどどどどういう、ことだ！三好長慶！？俺のブラックリストN

０．１に位置するはずの天敵だというのか！？この女の子がッ！？

それがどうしてここに？

いや、まてよ・・・そういえば風の噂でそんなことも・・・晴元の家臣だったな。そうか、じゃあここにいるのも納得、なのか？

「どうかなさいましたか？」

うおッ。

かわいい。

心配そうに眺めてくるところが。

いや、落ち着け、俺。俺はロリじゃない。年上な感じがいいんだッ！！喝！！

「ナ、ナンデモナイヨ」

「はあ・・・」

しまった。少し上ずってしまったか。

何はともあれ人付き合いは最初が肝心。ここは堂々と己の名を名乗ろうか。

内心の動揺を押し隠して、俺は背筋を張って名乗った。

「俺は足利義藤だ。以後よろしく」

ニカッと極めてフレンドリーに笑ってみせる。

どうよ、この会心の笑顔のできは。

俺の笑顔は広く宮廷にすら轟くのだ。

ここから長慶とうまいこと話して、つながりを作っておこう。長

慶が味方になってくれるのなら最大の懸念が取り除けるかもしれない。
かもしれない、というのはあくまでも長慶は危険勢力の一つでしかないからだ。

「・・・・・・・・おい、どうかしたか？」

今度は長慶が固まっている。
俺に声をかけられてビクッとなったとたん、その場で頭を下げてきた。

「申し訳ありませんでした！義藤様とは露知らず度重なるご無礼をッ」

「無礼とか、別に気にしてないからッ！顔上げてくれッ！」

この立場になってずいぶん経つとはいえ、なかなかそういうのには慣れていない。
一部の隙もない完全謝罪にはこちらが圧倒されてしまう。
生前は土下座なんて見る機会なかった・・・いや、まああるにはあるが、されたことはなかったからな。

「それはもう置いておいて、だ。こんなところで何をしていたんだ、長慶は」

「あ・・・それは」

「？」

「・・・・紅葉を見て回っていました」

ふむ、嘘は言っていないようだが、何故に視線を逸らす。

「木の陰で俺の事を見ていたのは？」

「それは、その・・・申し訳ありませんでした。義藤様の剣に見惚れてしまいまして・・・」

見惚れてって・・・

「いや、そんなにすごいことか？まだまだ未熟だし、見苦しいくらいだと思ってたんだけど」

師匠に満足に勝つことなく修行期間は終わったからな。

まだ、目標には届いていない・・・のだが、

「そんなことはありません！義藤様の剣は素晴らしいです！！」

拳を握り締めた長慶に否定された。

「わたしは、義藤様の剣に救いを感じたのです。心のうちに巣食う邪なる鬼を一刀の元に切り伏せていただいたかのようなッ」

鬼って。表現がすごいな。

晴元のところに居るのがそんなに辛いのか。まあしかたないか。親の仇だしな。

長慶と晴元の確執は父の代にまで遡る。

元々、長慶の父、三好元長は晴元政権の下で重臣として活躍していた。武将としての力には目を見張るものがあり、俺の父、義晴と

細川高国の連合軍を桂川原の戦いで打ち破るという戦果を挙げている。官軍を追い落とすという、決して誉められたものではないとはいえ、その武勲は確かだ。
当然、晴元政権が安定化するにつれて突出した力を持つ元長は主君との対立の末に、一向一揆と結んだ晴元によって討ち取られてしまうのである。
数々の戦でその武技を見せしめた傑物の呆気ない最期であった。
そして、その娘長慶は阿波で逼塞、今はこうして親の仇のもとで唯々諾々と従う日々を送っている。

「そうか、やっぱり大変なんだな」

「いえ、大変などとは・・・」

それから少し、会話が途絶えた。
お互いべらべらとムダ話の興じる性格ではない、ということだろう。その点、晴元たちがいつまでも騒いでいられるのが不思議でならない。むしろ羨ましいくらいだ。

「長慶は、もう戦に出てるんだよな」

不意に、そのことに行き着いた。
自分よりも少し年上であろうとも、生前の世界における中学生くらいであるのは間違いない。いくら能力があるとはいえ、少し早すぎる嫌いがある。

「長慶の軍は五百の手勢で敵兵二十の首級を獲ったとか。軍神もかくやという働きだったも聞いている」

「は。しかしそれはわたし一人の功ではなく、家臣の者たちが奮戦

した賜物であります」

「謙虚だな。だけど、どんな長慶だからこそ、みんなが付いて来るんだと思うよ」

「あり難き幸せにございます」

長慶の将としての才覚はもはや父のそれを凌駕している。間違いなく、晴元に対抗できるだけの勢力を築く力を持っているのだと、この問答だけで実感した。

だからこそ、尋ねておきたいことがある。

「なあ、長慶・・この国をどう思う？」

「は？」

予期していない問いだったのか、長慶は少し戸惑った表情を見せ、そして意を決したのかゆっくりと、しかしながら確りとした口調で語りだした。

「・・・・怖れながら、日ノ本は今、内に巣食う病魔に犯されているようなもの。このままでは遠からず、最悪の事態を招くものと」

そこで言葉を切る長慶。

おそらく俺の様子を伺っているのだろう。

実権がないとはいえ、将軍の息子に対するある種の国政批判だ。下手を打てば無礼討ちになりかねない。

つまり長慶はそれを覚悟した上で意見を述べたのだ。

それを考えると、ますます晴元の家臣に甘んじているのがもったいなく思えてくる。

諫言できる家臣は総じて忠臣たりえるのだ。

「・・・なるほど、たしかにその通りだ。この国は乱れきっている。民たちが明日すら見えぬ世を嘆くのも道理だろうな」

だから宗教が幅を利かせているとも言える。

長慶もはい、と答える。

「俺は将軍家の人間だ。なのに、今の俺には何もすることができない。本来ならば俺たちが率先して事に当たらなければならないのにッ」

言葉に出して、改めて不甲斐なさを思い知った気がした。

知らず知らず、生きていればいいという思いは失せていた。自分でも信じられないことだが、今の俺には足利義藤としての確たる願いがある。

「俺には夢がある。日ノ本を再び一つにし、天下に然るべき法と秩序をもたらすという大望がな」

「義藤、様」

「だから長慶。君さえよければ、そのときに俺の力になってほしい」

「ッ！・・・わたしのような者でよろしければ、いつでも御身のお力になりまする」

ざあ、と冷たい秋風が俺と長慶の間を颯爽と駆け抜けていった。

「姉上、どうかしたか？」

その夜、なんとなく物憂げな長慶に、一存が尋ねた。

「ど、どうもしてないぞ」

「？・・・ならいいんだが」

釈然としない様子ながら長慶にそう言われては引き下がるほかない。

「義藤様・・・願わくばこの力、あなた様のために」

その呟きは月を頂く夜闇に吸い込まれていった。

其の六（後書き）

長慶の読みに関して。

個人的にチョウケイよりもナガヨシのほうが好きなのでここではそのようにします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3239y/

義輝伝　幕府再興物語

2011年11月10日01時07分発行